

# 國學院大學 研究開発推進機構 機構ニュース

Vol.11 No.2  
発行人 井上 順孝  
編集人 平藤喜久子  
〒150-8440 東京都渋谷区東  
4丁目10番28号  
電話 (03) 5466-0104  
FAX (03) 5466-9237

## 「英語圏における神道研究のいま」 「縄文の哲学思想」 公開学術講演会

### シンポジウムの目的

平成二十九年十一月二十五日、ヘレン・ハーデカ氏（ハーバード大学教授）と小林達雄氏（國學院大學名誉教授）を講師として招き、公開学術講演会が開催された。本年度は研



ヘレン・ハーデカ氏

究開発推進機構が平成十九年に発足してから十年目の節目にあたる。そのため機構十周年を記念し、國學院大學二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」以来、機構発足後に至るまで、重要な役割を果たしてきた二人の講師を招くこととなった。

ハーデカ氏は英語圏における代表的な神道・日本宗教研究者であるが、平成十二年から始まった國學院大學とハーバード大学ライシヤワー日本研究所との研究交流でも仲介役を果たすなど、本学との関わりが深い。小林氏も縄文文化の研究で知られる著名な考古学者であり、前述のCOEプログラムにおいて拠点リーダーを務め、機構にも発足当初から関与していた。機構発足直後の平成十九年度の公開学術講演会でも講師を務めている。

以上二人の講師を迎え、本年度の公開学術講演会は機構十周年にふさわしい充実した内容となった。

### 目次

- ◆ 國學院大學研究開発推進機構十周年記念 公開学術講演会  
「英語圏における神道研究のいま」「縄文の哲学思想」…………… 1
- ◆ 國學院大學研究開発推進機構十周年記念 第四十三回 日本文化を知る講座  
「国際研究フォーラム「日本の宗教はどう教えられているか」…………… 4
- ◆ 共存学公開シンポジウム  
「復興・伝統文化・ネットワーキー東日本大震災から七年目の今」…………… 7
- ◆ 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業  
「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」活動報告…………… 8
- ◆ 文部科学省私立大学研究ブランディング事業「古事記学の推進拠点形成  
―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―」活動報告…………… 9
- ◆ 國學院大學創立百三十五周年記念展示  
「有栖川宮家旧蔵資料と國學院大學の歴史」  
國學院大學創立百三十五周年・國學院大學院友会発足百三十三周年記念特別展  
「高田宮家所蔵 根付コレクション」…………… 11
- ◆ 平成二十九年年度 國學院大學博物館活動報告…………… 12
- ◆ 彙報…………… 13
- ◆ 資料紹介「山梨県笛吹市 花鳥山遺跡出土 深鉢」…………… 16

講演1「英語圏における神道研究のいま」  
講演者 ヘレン・ハーデカ

発表の概要  
最初にハーデカ氏は國學院大學がハーバード大学ライシヤワー日本研究所との研究協力のために尽力してきたことに対して感謝の意を表し、また今年度をもって退職する井上順孝・研究開発推進機構長に対する謝辞を述べた。前述のCOEプログラムの成果として公開された *Encyclopedia of Shinto* などの神道・日本宗教に関する英語資料は、海外においてこれを学ぶものにとって有益な助けになってきたという。

COEプログラムでは、日本国外の神道・日本宗教研究者を招いたシンポジウムも開催された。それに

よって国内外の研究者たちの間にネットワークが形成され、そこで提起された議論は、その後の海外における神道研究の基盤になったという。

(一) 日本の外で神道を研究するということ  
ハーデカ氏によれば、英語圏における日本宗教史の研究は五つの分野に分けられる。すなわち、神道、仏教、キリスト教、新宗教、民俗宗教である。このうち最も長い歴史を持ち、研究が最も盛んで、研究の環境も整っているのは仏教だという。対照的に、神道の研究環境を整備しようとする試みは端緒に就いたばかりである。國學院とライシヤワー日本研究所の相互交流は、アメリカの大学と神道を専門とする日本の大

学が初めて連携した例だろう。神道研究を日本仏教研究と同水準にまで高めるには、さらなる結びつきと時間が必要である。

現状において、アメリカの大学で神道に関する授業は必ずしも十分に提供されているわけではなく、学生が手に取りやすい一般的な神道についての書籍は、しばしば古く、魅力のないものである。そこから進んで神道についての一次資料を検討すること——それを読解することや、日本で資料調査を行うことを含めて——はさらに困難なのである。

また、日本で生まれ育った場合を除けば、神社や民俗宗教の行事など、神道にまつわる経験をするとはまれである。この点でも、多くの街になんらかの形で寺院や瞑想グループなどが存在する仏教と対照的である。

さらに英語圏では、「明治維新以前に神道なるものは存在しなかった」あるいは「吉田兼俱以前には神道は仏教の一部にすぎなかった」といった黒田俊雄氏の学説が、十分な再検討を経ないまま受容されているという状況がある。こうした要因により、英語圏で神道を研究することはハードルが高くなっている。

他方、神道に対して否定的反応を示す中国や韓国の留学生は少なくないつつある。概してアメリカの大学生は、神道と第二次世界大戦を結びつけなくなっている。神道と軍国主義を関連づける見方が消えつつある背景には、神道を日本のポップカルチャーと肯定的に結びつけるようになったこと、また真珠湾攻撃などの

出来事の記憶が薄れているということがある。

ハーデカ氏は、日本の学界の外部で神道を研究することには利点もあると述べた。一つには、海外での神道受容史に関する英語やヨーロッパ言語の資料、また占領期のアメリカ政府にまつわる資料に容易にアクセスできることである。他の利点としては、日本の神道研究者とは異なる視点を取りうるということがある。

第三の利点として、フィールドワークの方法がある。日本の宗教研究には、複数の研究者がチームを組み、短期間でデータを収集するフィールドワークの伝統がある。こうした方法に触れることは、一年以上の調査を通例とするアメリカの神道研究者にとって有益なのである。

(二) 神道研究を促進する機会としての大嘗祭  
ハーデカ氏によれば、日本と海外の研究者が協力して神道研究を進展させることのできる絶好の機会がある。それは二〇一九年に行われる予定の大嘗祭である。

大嘗祭は一般の報道でもとりわけ「日本独自」のものとして取り上げられるだろう。しかし宗教研究の観点からすると、過去の日本や、日本以外の他の社会における宗教現象と共通する面に着目することが重要である。すなわち宗教と王権をめぐる新たな研究の契機になりうるのである。そのような課題は海外と日本の研究者による共同調査に適している。

宗教と王権、あるいは聖なる王権

は、宗教研究の歴史において主要なトピックであり続けてきた。近年では、王の神性の問題などをめぐる比較研究が行われている。大嘗祭は、こうした国際的な宗教研究の潮流と神道研究を結びつける機会になる。

退位をめぐる一連の出来事と様々な見方の背景には、未解決の問題がある。一つには、政教分離規定との関連における皇室祭祀の法的地位の曖昧さ。もう一つは昭和天皇のいわゆる「人間宣言」である。そこでは天皇が「現御神」であることは否定されたが、天皇家が神孫であることは否定されていない。第三に、大嘗祭を捧げる対象である神を特定できないという問題である。これらの問題の解明は、大嘗祭を対象とする宗教研究の第一の課題であり、それは神聖王権をめぐる近年の宗教研究にとって重要な貢献となるだろう。

大嘗祭それ自体は別としても、即位式は神社の研究にとっても良い機会となる。なぜなら皇太子の即位を祝って、祝詞の奏上や神楽などが行われるだろうからである。私たちはそれをどのように観察し、記録し、保管し、研究するか、計画を立てる必要がある。また、各地の自治体などのように即位に対応するのか、さらにメディアはこの即位をどのように報道するのだろうか。前回の大嘗祭とは異なり、現在はインターネットとソーシャルメディアが発達している。これらは大嘗祭が行われる時どのような役割を果たすのか。そしてそれをどのように記録するのか、という課題があるのである。

宗教研究の観点から言うと、大嘗祭の現象は日本社会全体との関わりと切り離せない。メディアによる報道は、これからの日本人の天皇理解に影響を及ぼすだろう。おそらくは「特別報道」によって世界中の人々が大嘗祭に注目することになる。その時ジャーナリストが時代遅れの神道観に陥らないように助けることも、研究者の責任なのである。

大嘗祭が日本社会と不可分である以上、その批判者とも不可分である。先の大嘗祭の時と同様に、それを政教分離原則の侵害と見なす市民も出現するだろう。先の大嘗祭をめぐる訴訟はいずれも敗訴に終わったが、一九九二年の訴訟では裁判官が「傍論」において大嘗祭の合憲性に疑義を呈した。それを根拠として将来的にまた訴訟が起される可能性がある。海外の研究者の課題は、そのような問題をめぐって一方の立場に立つことではなく、その問題と、そこに関わっている人々について解明し、データを保管することなのである。

次の大嘗祭は日本の宗教、文化、社会の側面としての神道の研究を進展させるまたとない機会である。ハーバード大学でも大嘗祭に関する小規模な展示を開催する計画が進んでいるが、このような催しはより多くの場所で行われるべきだろう。

海外の神道研究は高いハードルに直面しているが、同時に期待すべき可能性も私たちの前に広がっているのだと述べ、ハーデカ氏は講演を締めくくった。

(文責・齋藤公太)

## 講演2「縄文の哲学思想」

講演者 小林達雄

## 発表の概要

まず、旧石器時代と縄文時代の生活様式の違いは定住化であり、ムラを営むようになったことである。それによって、従来、自然秩序のなかの一要素であったヒトが、そこから抜け出し、周囲の自然を定点観測するようになる。その定点観測の場がムラであり、その周囲にはハラが展開する。ハラは、ヒトがそれまで身を置いていた自然秩序が保存、維持されている空間である。ムラという人工的空間の出現は、その対称にある自然空間への視線を広げた。それは、近景であるハラ、中景・遠景として背景であるヤマさらにソラにまで視線が広がり、ヒトによる自然の遠近観察を可能にした。縄文人は、その風景の中から好みの自然物を抽出していく。例えば、富士山のような左右対称の山を抽出する。さらに、その山を基準として、新たに太陽の動きに視点を移していった。それにより、春分、秋分、夏至、冬至といった概念が生まれたと考えられる。例えば、東京都八王子市周辺で



小林達雄氏

は大きく安定的な縄文集落跡が一直線に並び、さらにその先には富士山が存在する。そして、冬至の日没が、それらの集落において富士山の方向となっている。しかし、以上のように、良好な居住環境と天体的な現象を見られる場所が一致する事例は少なく、ムラから離れた土地にストーンサークルや環状列石のような特別なモニュメントをつくるようになる。また、青森県三内丸山遺跡の六本柱のように夏至と冬至の時に三本ずつ向き合った柱の間を日が昇降するようなモニュメントをムラの中につくるようになる。

しかし、モニュメントの作成には、多大な労力が費やされる。演者は、それによって直接的な利益が得られることはなく心を満たすものと考えるべきであるという。同様なものは、世界的にもみられ、その例として、イギリスのストーンヘンジ、エジプトのピラミッド、そして、バベルの塔などがあげられる。日本においても、古墳時代の前方後円墳、古代の寺院、城の天守閣があげられる。さらに、演者は、弥生時代の環濠集落もそのような目的でつくられたものである可能性を指摘した。

さて、栃木県小山市寺野東遺跡の直径一五六メートルのドーナツ状の土手の高さは地点によってまちまちである。北海道千歳市の周堤墓の土手も同様の傾向がみられる。また、ストーンサークルもきれいな正円形をなしていない。これらのモニュメントが歪な形状である要因として、まず、これらの構築には複数のムラ

が関わっていたこと、そして、その工区はムラ単位で分かれ、そして相互に手伝うことがなかったことなどが推測できる。そして、縄文人にとってのモニュメントの位置付けは、完成させることなく、それらを造り続けること、その作業に関わりを持つことが重要であったと演者は考える。

縄文時代においてハラは従来の自然秩序が維持されている空間であり、そこから、生活に必要なさまざまなものを獲得していた。一方で、大陸側におけるムラの始まりは農耕と連動しており、そのムラにはハラがなかった。彼らにとって、ハラは競って開墾する土地であり、人工的な空間であるノラに塗り替えられていった。自然との共存共栄を続けた縄文人に対して、自然を人工的な空間に変えてきた大陸側では、自然との対峙は相反するものであった。大陸側のそれは四大文明を生み、さらに西洋的な歴史観を産む。そして、それをいまままで「人類の努力」として賞賛してきた。その到達点が原発など様々な問題の横たわる現代社会と言える。自然と共存共栄してきた縄文から現在をもう一度照らし出していく必要がある。

世界的にみて土器をはじめとする器は、機能や役割を重視して作られている。一方で縄文土器は、口縁部に突起をつけるなど機能や役割への追及を感じさせない。こうした無駄なものを取り付けるのは、世界中見渡しても縄文土器だけである。その突起を持つ土器は、北は北海道、南

は沖縄において出土している。その分布域は文化的な広がりであり、その文化の違いは言葉の違いとも相関する。遺伝学者のドーキンスは、著書『利己的な遺伝子』のなかで、生命体としてDNAを継承していくなかで、文化的要素も伝わっていくことを指摘しており(文化的遺伝子)、その文化的遺伝子こそ言葉であると演者は指摘する。日本語は、他の言語と比べて独特な個性をもっており、オノマトペ、つまり擬音語、擬声語、擬態語がその例として挙げられる。オノマトペは、自然の在り方を様々な形で言語表現しており、これらの発達は、縄文人が自然と共存共生していたからこそその産物である。つまり、ヒト同士の言語活動に近いレベルで自然と向き合い、活発に展開した成果であるといえる。そのような、オノマトペからもみられるような日本の自然観が俳句へとつながっている。つまり、今の日本文化のなかに縄文的な文化的遺伝子が息づいている。そして日本文化は、世界の行く末を考える上で、様々な問題を立ち止まって考える際の重要なヒントとなりえる。

最後に、演者は二〇二〇年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台に、火焰土器をモチーフにすることを提言していると述べ、世界に日本文化としての縄文文化のメッセージを発信できればという言葉で講演を締め切った。

(文責・内川隆志・阿部常樹)

### 國學院大學研究開発推進機構十周年記念 第四十三回 日本文化を知る講座

#### 講座の概要

本年度の「日本文化を知る講座」は、平成二十九年六月三日、十日、十七日、二十四日の四回にわたり行なわれた。

平成十九年に國學院大學研究開発推進機構が設立されてから十周年にあたる本年度は、本機構の研究成果を多くの方に知って頂くために、これまでのような統一テーマは設けず、

- ① 古典からみる日本文化
- ② 國學院大學の考古学



- ③ グローバル時代の日本文化
- ④ 祭りとお祭りと日本文化

本年度の「日本文化を知る講座」という四つのテーマを設け、各回二名の発表者で行うこととした。本機構が発足した平成十九年度は、「人文資産の学術的価値と創出的発信―過去を踏まえ、未来に向かう―」として、校史・学術資産研究センター、学術資料館（現在の学術資料センター）の考古学資料館部門・神道資料館部門、日本文化研究所の各機関長・部門長と若手研究者が発表を行った。本年度の形式は、

これに習ったものである。以下、概要を述べるが、『國學院大學研究開発推進機構紀要』一〇号（二〇一八年）に、発表者によるそれぞれの詳細な要旨が掲載される。本稿はその要旨をもとに文責者がまとめたものである。

#### ① 古典からみる日本文化

皇典講究所・國學院と『古事記』

渡邊卓（本学助教）

平成二十八年度文部科学省私立大学研究ブランディング事業に「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―が採択されたことをうけて、本学は古事記学センターを研究開発推進機構内に設置した。

『古事記』研究は荷田春満、本居宣長等によって近世になってようやく盛んになった。國學院大學図書館は春満の学説を弟子が『古事記』（寛永版本）に書き入れたものを所蔵している。

本学及びその母体となった皇典講究所では国学者の学統に連なる人々が教壇に立ち、また『校定古事記』をはじめ、『古事記』に関わる刊行物も出版していた。近代の『古事記』研究を考える上で注目すべき人物として、國學院の一期生であり後に本学教授となる三矢重松や、彼の次世代の研究者で本学教授であった武田祐吉がいる。

本学が用いている「古事記学」の語も武田が講義メモの中で用いたもので、本学教授であった青木周平が

見出した。このように、本学が取り組む『古事記』研究には国学からの学問の系譜があり、それを支える本学の学術資産や資料がある。

・ 物語絵巻・絵草紙をよむ

針本正行（本学教授）

『源氏物語』絵合巻から、平安時代には、宮中の儀式や日本・中国の物語文学などを絵画化していたと推測される。時代が下り、江戸時代前期、特に寛文・延宝期には多くの絵入りの物語絵巻や絵草紙が制作され、國學院大學図書館も『異越絵』『住吉物語』などを所蔵している。

『住吉物語』は、いわゆる継子いじめの物語であるが、様々な本文が確認されている。同館は四種類の『住吉物語』を所蔵しており、これらを比較すると、物語の本文の展開や、どのように絵画化されたのかがみとれる。

また、國學院大學図書館所蔵『住吉物語』（三冊本）には同館所蔵の『かくれ里』（二軸）、『判官都ばなし』と同一の印記があり、同じ繪雙紙屋で制作されたものと思われる

#### ② 國學院大學の考古学

・ 國學院大學の考古学とコレクション形成

内川隆志（本学教授）

國學院大學の考古学研究は、昭和三年（一九二八）、樋口清之が創設した考古学陳列室と密接な関係をもつて歩んできた。

本学で考古学が講じられるようになったのは明治四十四年（一九一）

のことである。その後、一時、中断し、大正十一年(一九二二)に再び開講される。着任した鳥居龍藏のもとには、谷川(大場)磐雄や樋口清之らがあつまつた。樋口は、昭和三年(一九二八)、自らが収集してきた考古遺物をもとに、考古学陳列室を公開する。これが、國學院大學博物館の淵源となる。その後も各地で行われた発掘調査やコレクションの寄贈によって、資料収蔵や、本学の学問も進展していった。

今後は、本学博物館史の整理や樋口清之の顕彰を行うとともに、これまでに蓄積された学術資産を、今日の学問レベルで再整理・再評価を行う必要がある。

・神道考古学から祭祀考古学へ

笹生衛(國學院大學博物館長、本学教授)

本学の出身で、神道考古学を提唱した大場磐雄が示した古代の祭祀像は、現在も大きな影響を与えている。四世紀後半から五世紀には、大和地域の王権とのかかわりで、日本列島の東西に祭祀の場が成立していた。近年の新たな研究・調査成果から、古代の祭祀の場は多様な施設・建物の複合体であった可能性が示されている。また、祭祀の場では鉄製品等が用いられ、伊勢の神宮の神宝につながる飾り太刀や紡績具といった品々も五・六世紀には捧げられていることが明らかとなった。

大場は、祭祀の場において神は神籬(榊などの樹枝)などに寄り着くと考えたが、古代の神は特定の場に

坐す存在で、神籬は神を象徴する器物を納めた倉を区画・遮蔽した施設であると考えられるようになった。

七世紀になると、東アジアの情勢は大きく変貌し、日本も律令制を取り入れた。この中で、各地の主要な祭祀の場は、その制度に組み込まれ、神社となった。

③グローバル時代の日本文化  
・日本の外から見る「日本文化」

星野靖二(本学准教授)

自明のものと捉えているかもしれない日本文化を改めて「日本文化」として検討するためには、離れたところから見てみる必要がある。それは国際発信、比較、交流といった営みと切り離すことができない。

「日本文化」に対しては、様々な関心が日本国外から向けられており、また日本語学習の目的も単一ではない。

現在の「日本文化」の国際発信の状況については、その多様な興味関心に応える形で発信することができているかを検討する必要がある。インターネット上のデータベースなどの検索の便の向上や資料のオープンアクセス化など、利用者に使いやすい形で情報を発信する必要性が感じられる。

このような取り組みは、「日本文化」に関心を持つ海外の人々のみでなく、日本の利用者にとっても有益なものとなる。

・「日本文化」を誰に伝えるのか  
井上順孝(國學院大學研究開発推進機構長、本学教授)

國學院大學日本文化研究所は、その創立以来、研究成果の国際発信を常に心掛けてきた。近年、日本文化が複数のルーツを持っていることが明らかになったことや、グローバル社会が進化したことにより、改めて日本文化について考えることを促された。研究開発推進機構では、これまで英語によって成果の発信を行ってきた。しかし、グローバル化、情報化のもとで、多様な言語によって発信することや世界には様々な宗教文化があることを意識したうえで日本の宗教文化を発信することが求められる。

このようなグローバル時代には、それに応じた宗教文化の国際発信が模索されてよい。また、本機構は多様な宗教文化を理解する姿勢があり、多くの神道研究者もいる。これは、その拠点となる上で利点となる。

④祭りと日本文化  
・資料からみた祭り

大東敬明(本学准教授)

祭り(祭祀・祭礼)及び、その展開を学説・理論ではなく、資料そのものにもとづいて明らかにすることは神道史研究の上で重要である。

『中臣祓』(春日社家大東家本)に収録される「白杖之事」は祭礼行列の先頭を行き、邪気を避けるための祭具である白杖(スハエ、ズバエとも)の由来を説く。「白杖之事」は、春日社と吉田家・吉田神道との関わり

りの中で、両者に縁の深い天児屋根命(春日大明神)に関連付けて形成されたものである。

神社だけでなく、祭具にも様々な縁起や言説が形成される。それによって、祭具が新たに意味づけられることもある。モノの変化を追うとともに、それを取り巻く言説(新たに作られる神話)(心、精神的側面)の変化を追うことも必要であろう。

・一宮の祭祀?

加瀬直弥(本学准教授)

神社の重要性を推し量る材料として、しばしば社格が目される。一宮も社格として位置づけられるが、それについて、国司による神拝と奉幣という二種の神事に伴う神社の序列化が、一宮選定の決め手だと推測されてきた。しかし、すべての一宮がそうであったわけではない。

近年の研究から、一宮が単体では重要な役割をさほど持っていないことが浮き彫りとなった。さらに神事に関しても一宮全体で統一性は乏しい。朝廷の側からすれば、一宮を一律で扱うような制度は神社修造を確認できるだけで、それすらも一宮に限定したものでなかった。一宮を単体で見ても、どういった存在であるかを考えることは、特に中世の政治的側面からのアプローチ上は、以前ほど意味を持たなくなつたようにも受け止められる。しかし、その視点は、一宮の存在そのものを改めて多角的に見直す余地も生み出したといえる。

(文責・大東敬明)

## 国際研究フォーラム 「日本の宗教はどう教えられているか」

平成二十九(二〇一七)年十一月二十六日、日本文化研究所と古事記学センターの主催により、国際研究フォーラム「日本の宗教はどう教えられているか」が開催された。情報通信技術が発達し、グローバル化した現代世界において、実際に日本の宗教はどのように教えられているのか、またどのように教えられることができるのか。こうした課題を検討することが本フォーラムの趣旨である。日本国外の学生を対象とした授業の経験を有する六人の報告者を招き、それぞれの教育方法や現状における

問題点などを報告してもらった上で、実践的な意見交換が行われた。

報告① ダーヴィッド・ヴァイス (テュービンゲン大学日本学科)

最初の報告者であるヴァイス氏は、「ドイツの大学で日本神話がどう教えられているか―テュービンゲン大学日本学科の授業を中心に―」という題目で、民族的アプローチによる日本神話の講義について報告を行った。授業では近隣諸国との関連性や日本神話内部の不均質性、神話の政治的側面などを学生に伝えているという。

報告② 平藤喜久子 (國學院大學研究開発推進機構)

続いて研究開発推進機構の平藤氏が、「日本宗教はどう教えられているか―日本神話と神道の授業から―」と題して、国内の留学生向け授業やフランスでの授業経験に基づく報告を行った。ポップカルチャーのような視覚的資料の活用や神社見学など、日本神話や神道について教える際の実践的工夫が紹介された。

報告③ マイカ・アワーバック (ミシガン大学日本研究センター)

アワーバック氏は「日本の宗教」を英語で教える一試み―無加工に近い教材を求めて―と題して報告を



行った。同氏は「差別的」と受け取られることを恐れて「他者」に関する発言を控えるという現代アメリカの風潮を指摘し、「無加工」の資料に取り組ませることで本当の「他者」理解をうながすという自らの教育方法を解説した。

報告④ クリントン・ゴダール (北海道現代日本学プログラム)

「北海道大学の現代日本学プログラムで宗教を教える」と題した報告の中で、ゴダール氏は、まず近代化と伝統宗教の相克という世俗化論の克服を課題として挙げた。そして学生の主体的な問題意識を尊重し、自由なディスカッションを重視する授業の方法を提示した。

報告⑤ シンシア・ボーゲル (九州大学人文科学研究院)

ボーゲル氏は宗教的視覚文化という観点からの授業方法について報告を行った。日本の宗教文化における複数の信仰の共存や、現代における宗教の解釈といった問題について、神像や仏像の写真などの視覚的資料を活用することで、学生の考えを深めさせていくという方法が紹介された。

報告⑥ 櫻井義秀 (北海道大学大学院文学研究科)

櫻井氏は「Sociology of Religion for Foreign and Japanese Undergraduate Students」と題して、国内の大学で行っているバイリンガル形式の授業の様子を、授業で用いているスライドを示しながら説明した。授業を通して日本人学生も自国の宗教文化への理解を深め、外国人に説明できるようになることを目指しているという。

最後の全体討議では、学生に対する評価方法やメディアの活用状況、あるいは「日本の宗教」なるものを本質化してしまうことを避けるための方法などについて、フロアから活発な質問が投げかけられた。また、報告者たちからは教材としての観点から日本宗教に関する資料の翻訳と共有といった課題が提示された。

このように本フォーラムは、六名の報告者それぞれの個性豊かな教育方法を通して、実践的な宗教文化教育の手法を学ぶことのできる充実した機会となった。(文責・齋藤公太)



## 共存学公開シンポジウム 「復興・伝統文化・ネットワーク

### ―東日本大震災から七年目の今―

平成二十九年九月九日、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」共存学グループ主催の公開シンポジウム「復興・伝統文化・ネットワーク―東日本大震災から七年目の今―」が、常磐松ホールにて開催された(共催)「基盤研究(C)」災害復興と伝統文化の役割に関する学際的研究)。以下、当日の基調講演・事例報告及び総合討議の内容を紹介する。

#### 第一部 基調講演

第一部では、「リスク社会」における地域社会のレジリエンスと祭祀の意義について」と題し、滝澤克彦氏(長崎大学多文化社会学部准教授)による基調講演が行われた。

滝澤氏は、東北大学東北アジア研究センターによる宮城県からの受託事業「東日本大震災に伴う被災した無形民俗文化財調査」に参加し、平成二十三年度には二十地区、平成二十四年度には二十三地区を対象とする無形民俗文化財調査を実施しており、その成果を基に、地域の復興と祭祀の復活との関係性について論じた。

まず祭祀の復活が地域の復興に寄与するかどうか、という視点が重要である指摘した上で、両者の関係性が多様であり、祭祀の復活が必ずしも地域復興に結び付かない事例

もあることを指摘。さらに、震災によって共同体が脆弱化し、生活基盤が出来ていない状況では、かつての祭祀をそのまま再開することはできず、避難や移住によって祭祀の担い手も変化すると述べた。また、ローカルなコミュニティへの外部からの介入で、個人がバラバラになり、未来が不確定となる「リスク社会」の状況が、祭祀や民俗芸能の現状にも表れているのではないかと指摘。被災地復興においては、地域の自律性が重要であり、外部からの援助もそれを踏まえた上で慎重になるべきことを述べた。

#### 第二部 事例報告及び総合討議

第二部では、東梅英夫氏(白澤鹿子踊保存会会長)「震災を超えて新たな未来へ」、荒木奏子氏(にじのライブラリー前現地責任者)「人々が集まる場所とは」にじのライブラリーから見た復興と人々の暮らし」、久保田裕道氏(東京文化財研究所無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長)「無形文化遺産の災害復興と防災」の三人の事例報告があり、茂木栄氏(國學院大學神道文化学部教授)、黒崎浩行氏(國學院大學神道文化学部教授)からのコメントの後、総合討議を実施した。

東梅氏は、岩手県大槌町に伝わる「白澤鹿子踊」の保存会館「伝承館」

が、震災直後から避難所となった背景として、門外不出であった鹿子踊を海沿いの「町方」地区をはじめ、広く町内外に開放した決断があったことを説明。鹿子踊に参加していた子供たちの家族が避難所に集まった経緯があることを述べた。また、鹿子踊によるネットワーク形成の経験から、郷土芸能が人々の心を繋ぎ、地域の拠り所となる役割を果たすことを認識したという。

荒木氏は、陸前高田市気仙町の今泉天満宮境内にある子供向け図書館「にじのライブラリー」(平成二十三年十一月開設)の活動を報告。図書館活動だけではなく、手芸サークル等の趣味の場・学びの場となった同ライブラリーについて、まちづくりの情報共有等、住民が落ち着いて語りあえる場となり、地域コミュニティの核となる場になったと述べた。また、居心地の良い場所を作りたいと思って作ったライブラリーが、結果として人々が集まる場になったという。

久保田氏は、まず宮城県牡鹿郡女川町と福島県双葉郡浪江町の事例から見た民俗芸能の復興過程を紹介。その上で、無形文化遺産の防災について、地域毎の状況が異なるため「個別被災事例の収集」が重要であり、支援が欲しい側と支援する側とを把握して「支援の枠組」を考える必要があること、保存団体や職人、行政、研究者等が普段から通じ合えるネットワークを構築すること、これらの情報収集と発信とが重要であること等を指摘するとともに、災害に関わる

伝承的知識も重要であると述べた。

これらの発題を受けて茂木氏は、コミュニティの核となる神社が残っていたことが祭祀や芸能の復活に際して重要であったと指摘するとともに、被災地のネットワークの中心に地元のキーパーソンが存在することの重要性を述べた。また黒崎氏は、地域の再生と祭祀の復活はパラレルではないという見方が重要であり、支援のミスマッチを防ぎ、何が災害によって失われることを防ぐのかを考える必要があると指摘した。



共存学公開シンポジウム「復興・伝統文化・ネットワーク―東日本大震災から7年目の今―」総合討議

総合討議では、被災地における祭祀や郷土芸能などの伝統文化が持つ働きや、地域の伝承的な知識を活用した防災の重要性等について議論が為され、こうした取り組みの蓄積を踏まえて、次代に継承していくことの重要性が指摘された。

(文責・宮本誉士)

## 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」活動報告

本事業は、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会の決定に基づき、本学の「建学の精神」の学術的具現化と、本学の特色を活かした地域貢献・社会還元を、「共存社会の構築」という観点から追究することを目的とする、学部横断型の学際研究事業である。

本学が立地する渋谷を研究領域とする「渋谷学」、地域・日本・グローバル化する社会を研究領域とする「共存学」から構成される本事業は、平成二十七年からの三カ年計画で実施するものであり、本年度が最終年度となる。以下、本年度の渋谷学グループ、共存学グループそれぞれの活動内容を報告する。

### 「渋谷学」グループ

本年度は、現在進行中の渋谷駅周辺の再開発事業を踏まえながら、渋谷駅周辺の歴史の変遷と現状を対象とする聞き取り調査や資料収集を継続的に実施するとともに、東京・渋谷の都市形成史を視野に入れた「共存社会」の多様な在り方を検討することを目的に、研究事業を展開した。

公開研究会としては、再開発に関わる渋谷川をテーマに、平成二十九年第一回渋谷学研究会「再開発と渋谷川―まちづくりと都市河川再生の軌跡―」(平成二十九年八月二十八日開催)を開催した。コーディネート・司会を田原裕子経済学部

教授が務め、第一部「渋谷川の変遷とまちづくり」(石井健蔵・NPO法人渋谷川ルネッサンス事務局長)、

第二部「都市河川再生とまちづくり」(富沢房雄・東京都建設局河川部計画課低地対策専門課長)、第三部「渋谷川の再開発が目指すまちづくり」(中田和宏・渋谷区都市整備部都市

基盤整備担当課長)の構成で、渋谷川の歴史を確認しつつ、現在進行中の渋谷再開発事業に関わる「渋谷川」の再生について、他の都市河川再生に関する事例等とも比較しつつ、発題及び議論が為された。同研究会の記録は、『渋谷学ブックレット5 再開発と渋谷川―まちづくりと都市河川再生の軌跡―』(平成三十年三月)として編集・刊行する。

また、「首都西郊の拡大とインフラ整備」をテーマに、首都圏形成史研究会との共催公開研究会を、平成三十年一月六日に開催(発題者等は彙報参照)したほか、平成二十九年第二回渋谷学研究会「民俗芸能の舞台公演―その歴史と意義―」を、平成三十年三月十五日に開催する予定である。

渋谷学グループの成果公開については、『都市民俗研究』第二十三号(平成三十年二月)に成果を公開するほか、渋谷学の研究成果を教育に還元する、オムニバス形式の学部授業「國學院の学び(渋谷学)」(平成二十九年後期)を実施した。

### 「共存学」グループ

平成二十三年度以降、東日本大震災被災地のフィールド調査を継続してきた共存学グループでは、被災地における復興と地域コミュニティ、神社、伝統芸能との関係性等を焦点とする調査を進めるとともに、「共存社会」の多様な在り方を検討した。

被災地復興の現状と課題を考えることを目的に開催した平成二十九年度共存学公開シンポジウム「復興・伝統文化・ネットワーキング―東日本大震災から七年目の今―」(平成二十九年九月九日開催)では、基調講演

「リスク社会」における地域社会のレジリエンスと祭祀の意義について(滝澤克彦・長崎大学准教授)、個別報告「人が集まる場所とは」(荒木奏子・にじのライブラリーから見た復興と人々の暮らし)、「荒木奏子・にじのライブラリー前現地責任者」、個別報告「震災を超えて新たな未来へ」(東梅英夫・大槌町白澤鹿子踊保存会会長)、個別報告「無形文化遺産の災害復興と防災」(久保田裕道・東京文化財研究所無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長)の構成で、テーマに基づく発題・議論が為された。コメントターは茂木栄

神道文化学部教授、黒崎浩行神道文化学部教授、司会は古沢広祐経済学部教授が務めた(詳細は、八頁参照)。

前回の共存学フォーラム「震災復興と文化・自然・人のつながり」(平成二十五年二月十七日開催)においては、岩手三陸地域を事例として、伝統文化・歴史・自然に基づいた東北復興の可能性を考えることを試み

たが、今回のシンポジウムでは、東日本大震災から七年を経て、様々な取り組みが為されてきた被災地復興の現状を踏まえながら、伝統文化の役割やネットワーキングの重要性等について、さらに多様な地域の個別事例に基づく検討が為された。同シンポジウムの記録は、『共存学ブックレット2 復興・伝統文化・ネットワーキング―東日本大震災から七年目の今―』(平成三十年二月)として編集・刊行する。

また、九月のシンポジウムにおいて議論された内容を基に、被災地復興における伝統文化と地域の自立性をテーマとして、平成二十九年度共存学公開研究会「復興・伝統文化と地域の自立性」(平成三十年二月二十三日開催予定)を実施する。なお、これら本年度実施の共存学シンポジウム及び共存学公開研究会は、基盤研究(C)「災害復興と伝統文化の役割に関する学際的研究」との共催事業である。

その他、平成二十九年前期に開講した学部オムニバス授業「國學院の学び(共存学)」においては、共存学の研究事業に関わる講師それぞれの研究成果が教育に還元された。

平成三十年三月九日には、「渋谷と東北から「世界」を見る」と題し、共存学グループ・渋谷学グループの研究成果を基に、「共存社会」を考える合同シンポジウムを開催する予定である。

(文責・宮本誉士)



## 文部科学省私立大学研究ブランディング事業 「古事記学」の推進拠点形成—世界と次世代に語り継ぐ 「古事記」の先端的研究・教育・発信—活動報告

はじめに

本学は、平成二十五年度から継続して推進してきた古事記学事業を基盤として、平成二十八年度文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に申請し、採択された「古事記学」の推進拠点形成—世界と次世代に語り継ぐ「古事記」の先端的研究・教育・発信—を推進している。

本事業は、本学において創立以来一三〇年以上にわたり継承されてきた学知に基づく学際的・国際的観点から「古事記」を再定位し、本学独自の「古事記学」の見地による、二十一世紀の『古事記伝』となる註釈書を編纂し、その研究成果を国内外に発信するとともに、教育へと還元するシステムを構築する。そして『古事記』に立脚し、日本文化の新たな創造と発展に寄与する世界的な研究拠点となることが目的である。

### 平成二十九年度の成果

本年度の全体目標として以下のものを掲げた。

・『古事記』研究の国際展開  
〈研究〉『古事記』関連ライブラリ―の設置、〈教育〉「古事記学」関連の講義実施・テキスト編集開始、〈発信〉国際発信に向けたコンテンツの構築  
これらの目標に対して、以下の個別の事業計画を推進した。

- ① 「古事記学センター」ホームページ・SNSの開設  
本ブランディング事業のHPを新たに開設した。本事業のシンポジウムや研究会の告知や報告を行うとともに、成果論集『古事記学』のPDF公開もしている。また古事記ビューワーとして『古事記学』収録の註釈を公開し、神名データベースや氏族データベースなど、本事業で作成した各種データベースも公開している。なお多言語化については現在作成中である。その他、情報発信としては「古事記学センター」のSNSを開設し、広報活動を行う体制を整えた。  
HP : <http://kojiki.kokugakuin.ac.jp/>  
Twitter:[https://twitter.com/kojiki\\_gaku](https://twitter.com/kojiki_gaku)  
Facebook:<https://www.facebook.com/kojigaku/>
- ② 学内定例研究会の実施  
事業を支える定例研究会は、AMC棟会議室〇六を会場に、七回開催した。研究会は、『古事記』の本文校訂・註釈の検討と、教員による研究発表・報告で構成される(以下、敬称略)。  
○第一回(四月二十六日、十六時〜十七時三十分)  
・古事記注釈17「天の石屋①」(谷口

- 雅博)
- 第二回(五月三十一日、十六時〜十七時三十分)  
・『古事記』の意識調査に関する分析報告(宮下雄治)  
・古事記注釈18「天の石屋②」(谷口雅博)
- 第三回(六月二十一日、十六時〜十七時三十分)  
・「真福寺本『古事記』の奥書をめぐって」(渡邊卓)  
・古事記注釈19「天の石屋③」(谷口雅博)
- 第四回(七月二十八日、十六時三十分〜十八時)  
・「古事記学関連データベースの進捗状況について」(井上隼人)  
・古事記注釈20「五穀の起源」(谷口雅博)
- 第五回(十月二十五日、十六時三十分〜十八時)  
・「[theancientritualsite] 報告(笹生衛)
- 第六回(十一月二十二日、十六時〜十七時三十分)  
・「オオゲツヒメ神話と比較神話学」(平藤喜久子)  
・「神楽の継承実態と学校教育での活用事例—地域文化資源としての神楽?」(山本健太)
- 第七回(十二月六日、十六時〜十七時三十分)  
・古事記注釈21・22「八俣大蛇退治①②」(谷口雅博)
- ③ 共通教育科目「古事記学」の開講  
平成二十九年度後期科目として「國學院の学び(古事記を諸分野から読む)」(金曜四限)を開講し、本

- 事業に携わる教員(谷口雅博、武田秀章、笹生衛、佐藤長門、平藤喜久子、松本久史、渡邊卓)が、学問分野の垣根を越えてリレー式講義で授業を行った。受講者は一〇〇名を超過した。
- ④ 本学関連団体と連携した講演等の開催  
○イギリス、カーメン・ブラツカイ



皇學館大学連携研究会の様子

笹生衛が、イギリスセインズベリー日本藝術研究所の招聘により、学術講演を七月十七日、二十日に行った。講演後には、同行した渡邊卓が同研究所と本事業との連携について協議を行った。

#### ○皇學館大学連携古事記学研究会

十一月十九日に、本学と研究協定を結んでいる皇學館大学と連携し研究会を開催した。遠藤慶太(皇學館大学)の基調発表と、本事業からは谷口雅博と笹生衛がコメントーターを務め、最後に渡邊卓の司会のもと総合討議を行った。当日は約五十名の来聴があった。

#### ⑤外部機関と連携した学際的・国際的ワークショップの開催

##### ○神楽調査

七月二十一日～二十六日に、山本健太が神楽関連の資料収集・視察をおこない、神楽継承者・関係者への聞き取りも実施した。

##### ○宮崎県との連携協議・神話伝承地調査

九月九日～十一日に、宮崎県主催・本学共催の「神話のふるさと県民大学」講座の講師として平藤喜久子が参加し、その後、渡邊卓を加えて宮崎県と次年度開催予定の国際シンポジウムについて連携を協議した。その後、渡邊は霧島神宮を中心とした神話伝承地の調査を行った。

##### ○国際研究フォーラム開催

十一月二十六日に、日本文化研究所との共同主催により国際フォーラム「日本の宗教はどう教えられているか」を開催した(詳細は本紙六頁参照)。六名の講師のうち、「日本神

話」の教育という観点からは、ダーヴィッド・ヴァイス(テュービンゲン大学)と、研究開発推進機構の平藤喜久子の報告があった。

#### ⑥国際シンポジウム開催

平成三十年一月二十日に、国際シンポジウム「時空を超える(言葉)



国際シンポジウムディスカッションの様子

「神話の翻訳をめぐる」を開催した。本年度は、『古事記』研究の国際展開とその水準の把握を目的として、翻訳に焦点をあてた。基調講演は、近年個人編集日本文学全集(河出書房新社)で『古事記』の翻訳を手がけるとともに同シリーズの編集を務める作家の池澤夏樹が「文体と速度と精神」という題で講演した。また、続いてバオロ・ヴィラーニ(イタリア・カタニア大学)とアラン・ロシエ(フランス・国立高等研究実習院)から『古事記』の翻訳について発題があった。月本昭男(上智大学)から、『古事記』以外の翻訳の立場として、ヘブライ語聖書の翻訳に

ついての発題を頂いた。最後にディスカッションとして、平藤喜久子の進行のもと、シルヴィオ・ヴィータ(京都外国語大学)をコメントーターに迎え、意見交換と討論が行われた。約二〇〇名の聴衆があった。

#### ⑦ヨーロッパ日本学会への参加

八月三十日～九月二日にかけて、ポルトガルのリスボン大学において開催されたヨーロッパ日本学会(EAIS)に井上順孝、平藤喜久子、キロス・イグナシオが参加し、本事業の研究成果を発表し、海外発信を行った。

#### ⑧『古事記』絵画コンテストの開催

「古事記アートコンテスト」として神道文化会との共催のもと、『古事記』に関する作品コンテストを行った。全国の大学・短期大学・専門学校から計一七件の応募があった。審査員は、谷口雅博、武田秀章、藤澤紫、松山文彦(一般財団法人神

道文化会専務理事・東京大神宮宮司)、中野リョーコ(フリーデザイナー・イラストレーター)の五名であり、公平な審査のもと特選一名、入選二名、佳作五名、審査員特別賞一名が決定した。表彰式は一月二十日の国際シンポジウム後に行われ、受賞作品は本学博物館で開催の特集展示「國學院の『古事記』研究―『古事記』絵画化の四百年―」(平成三十年一月十八日～三月十一日)において展示された。なお、この特集展示も、本事業の成果公開の一環である。

#### 成果の公開について

研究事業の成果公開については、各種の事業計画に基づき随時行われるほか、例年刊行している成果論集『古事記學』においても公開する。本年度で第四号となる同論集には、『古事記』注釈として、上巻の「天の石屋」から「八俣の大蛇退治」までを掲載し、このほか、昨年度の国際シンポジウムの講演録、論考三本、敷田年治『古事記標注』翻刻、英訳『古事記』を掲載する。英訳は既刊の『古事記學』に掲載された『古事記』注釈に基づいており、注釈まで含めた英訳として海外でも認知されてきているようである。なお、前号に掲載した『古事記』英訳については本事業のHPでも公開中であり、研究の利便性を高めることで、海外の『古事記』研究への寄与も図っていきたい。

(文責・渡邊卓)

## 國學院大學創立百三十五周年記念展示

### 「有栖川宮家旧蔵資料と國學院大學の歴史」

### 特別展「高円宮家所蔵 根付コレクション」

記念展示「有栖川宮家旧蔵資料と國學院大學の歴史」の概要

平成二十九年十一月四日(土)、本学は皇典講究所の創立から百三十五周年の節目を迎えた。本学では、これを記念して、同年五月二十八日(日)から七月二十三日(日)まで、國學院大學創立百三十五周年記念展示「有栖川宮家旧蔵資料と國學院大學の歴史」を本学博物館校史展示室にて開催した。

本展では、本学校史資料をもとに、建学の精神と建学以来の本学の歩みを「モノ」を通して紹介するとともに、有栖川宮家ゆかりの名品を展示した。

皇典講究所の初代総裁であった有栖川宮熾仁親王は、同所開鑿式に臨んで職員・生徒に対し「告諭」を寄せられた。この告諭に示された精神は、今日においても本学の建学の精神(神道精神)の基礎をなしている。このような御縁から、本学では高松宮宣仁親王妃喜久子殿下の御高配により、御襲蔵してこられた有栖川宮家ならびに宣仁親王・喜久子妃両殿下ゆかりの品々を拝領し、収蔵している。

収蔵品は大きく分けて「書」、「工芸品」、「馬具」、「楽器」、「茶道具」、「勲章」、「肖像類」に分類することが



でき、どれも精巧で美術的価値が高く、宮廷文化のみやびを伝える貴重な資料である。本展では、熾仁親王やその御子息である熾仁親王による「書」をはじめ、精巧な蒔絵を施した「御書架銘」「住吉の浦」、山崎朝雲作の木彫「お、寒む」、宮家の資料には珍しい馬具などの「工芸品」を中心に四十六点を展示した。

また、百三十五年にわたる本学の歴史において、最も混迷した時代に本学の維持・発展に貢献した「中興の祖」として、明治後期に本学の再建に尽力した佐佐木高行、大学令大学習格期の学長であった芳賀矢一、昭和二十年の敗戦直後に理事長・学長となった石川岩吉に関わる資料二十一点を展示した。

なお、本展の開催に際して、展示された「有栖川宮家ゆかりの品々」や「本学の歩み」の解説、「有栖川宮

家略系図」、「展示品目録」、「本学略年譜」からなる展覧会図録と併せて本学の歴史を解説したリーフレット「國學院大學百三十五年の歩み」を刊行した。



特別展「高円宮家所蔵 根付コレクション」の概要

本学創立百三十五周年と國學院大學院友会発足百三十五周年を記念し、平成二十九年五月二十八日(日)から七月二十三日(日)まで、前述の記念展示「有栖川宮家旧蔵資料と國學院大學の歴史」の開催に合わせ、特別展「高円宮家所蔵 根付コレクション」を本学博物館企画展示室にて同時開催した。

根付は、印籠や煙草入れなどの持ち物を携帯する際に、帯から提げる紐の端に付けた小さな留め具である。江戸時代の文化・文政年間(一八〇四―一八三〇)に最盛期を迎え、明治時代以降、和装から洋装への変化によって根付の需要は衰退していった。戦後、古典の模倣ではなく、現代的感觉でつくる現代根付が発展し、現在、美術品としての人気が国内外で高まっている。

本展では、世界有数の根付蒐集家であり、国内外において根付の普及発展に御尽力された高円宮憲仁親王殿下が、妃殿下とともに蒐集された根付コレクションの中から、国内外の現代根付を中心に、古根付や印籠、緒締を含む約二八〇点を展示した。

高円宮憲仁親王殿下が根付の大事

な要素とされた「洒落、捻り」と「温かみ」のある作品は、象牙や琥珀、黄楊といった木材など、多様な素材が用いられ、ひとつひとつに込められたさまざまな物語やメッセージが、会期中に訪れた約一万三千人の来館者を楽しませた。

開幕前日の五月二十七日(土)には、学術メディアセンター一階の常磐松ホールで高円宮妃久子殿下による特別講演「手のひらの小宇宙」が開催された。博物館内ホールにおいては、高円宮妃久子殿下によるテーパーカットを行い、妃殿下は関係者と共に展示会場を巡りながら、それぞれの根付作品にまつわるエピソードなどを織り交ぜ、ひとつひとつ解説をされた。

特別講演の後、有栖川宮記念ホールで妃殿下をお迎えしたオープンニングパーティーも開催された。

なお、本展の開催に際して、「展示品目録」(日本語・英語版)のほか、展示品の一部を収録した展覧会図録を刊行した。

(文責・國學院大學博物館)



# 平成二十九年 國學院大學博物館活動報告

## 一、活動報告

平成二十九年度は、博物館の展示公開として、記念展示一回、特別展一回、企画展五回、特集展示九回、関連展示一回、相互貸借特集展示(西南学院大学博物館(福岡県))と当館間の研究協力協定に基づく」を六回開催した。また、文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に採択された「東京・渋谷から日本の文化・こころを理解・体感するミュージアム連携事業」(以下、連携事業)では、多言語化関連の事業を行った。

## 二、展示公開(表1)

### 【記念展示・特別展】

・ 國學院大學創立百三十五周年記念展示「有栖川宮家旧蔵資料と國學院大學の歴史」(展示図録刊行)、会期：平成二十九年五月二十八日～七月二十三日。主催：國學院大學。  
 ・ 國學院大學創立百三十五周年・國學院大學院友会発足百三十年周年記念特別展「高円宮家所蔵 根付コレクション」(展示図録刊行)、会期：平成二十九年五月二十八日～七月二十三日。主催：國學院大學、一般財団法人 國學院大學院友会。

### 【企画展・特集展示】

・ 平成二十九年年度「國學院大學 春の特別列品―絵でみる日本のものがたり」

表1 平成29年度 展示内容と関連事業

展示(会期)	関連事業	
記念展示 國學院大學創立135周年記念展示「有栖川宮家旧蔵資料と國學院大學の歴史」(H29.5/28～7/23)		
特別展 國學院大學創立135周年・國學院大學院友会発足130周年記念 特別展「高円宮家所蔵 根付コレクション」(H29.5/28～7/23)		
企画展	國學院大學 春の特別列品―絵でみる日本のものがたり(H29.4/14～5/21)	Special Museum Talk 4/22 針本正行(本学教授)
	モノの力・ヒトの力―縄文から現代まで人と工芸の間にやどるチカラ(H29.7/28～10/9)	Museum Talk 7/29 内川隆志(本学教授)、8/5 小林達雄(本学名誉教授)、8/26 出川直樹(古美術研究者)、9/9 熊谷博人(装丁家)、9/16 堀江武史(文化財修復家)、9/30 赤木明登(塗師)
	神道の形成と古代祭祀(H29.10/14～12/10)	Museum Talk 10/14 笹生衛(当館館長・本学教授)、11/11 深澤太郎(本学准教授)、11/25 笹生衛、12/2 大東敬明(本学准教授)
	いのちの交歓―残酷なロマンティズム(H29.12/16～H30.2/25)	特別講演 12/23 赤坂憲雄(学習院大学教授・福島県立博物館館長)
		Museum Talk 12/16 石井匠(当館学芸員/岡本太郎記念館客員研究員)、2/24 石井匠
	映画上映会 12/16 ドキュメンタリー映画「久高オデッセイ」第3部 風堂	Talk Session 12/23 赤坂憲雄×石井匠、1/19 関野吉晴(探検家・医師)×石井匠、1/21 雲龍(笛奏者)×三上敏視(音楽家・神楽・伝承音楽研究)、1/27 井賢孝(写真家・山伏)×井上亜美(映像作家・振師)、2.10 田中望(画家)×藤原彩人(彫刻家)
吉田家：神道と典籍を伝えた家～國學院大學図書館所蔵吉田家旧蔵資料～(H30.3/3～4/15)	1/19 ドキュメンタリー映画「カラーライスを一から作る」	
特集展示	神田祭今昔(H29.4/14～5/21)	9/29 日本文化を体験する夕べ―雅楽を聴き、狩衣を着る―Experience! Evening of Japanese Culture―Enjoy Listening to Gagaku, and Wearing Kariginu―
	教派神道の教祖(創始者)たち(H29.5/28～6/30)	
	高倉家調進控 装束地残欠(H29.7/1～7/13)	
	Stonehenge ～描かれた古代の遺跡(H29.7/28～10/9)	
	ワーク ショップ	
	國學院大學考古学研究室発掘調査速報展示Ⅱ「発掘された縄文時代早期の土管―居家以岩陰遺跡の発掘調査―(H29.10/14～11/19)	12/9 祭祀と仮装風流 福原敏男氏(武蔵大学・教授)「大坂臨時祭の俄」、西岡陽子氏(大阪芸術大学・教授)「祭祀における俄」
祭礼と仮装(コスプレ) (H29.10/24～12/10)	1/20 千々和到(本学文学部教授)	
神仏に誓う―鳥羽藩御伽坊主等起請文―(H29.12/16～H30.2/1)		
國學院の「古事記」研究―「古事記」絵画化の400年―(H30.1/18～3/11)		
展間連携	日本文化を知る講座 関連展示(H29.6/2～6/9)	
相互貸借特集展示 XIII 「神道」の原型―古墳時代における祭祀遺跡―(H29.1/27～5/24) 会場：西南学院大学博物館		
相互貸借特集展示 XIV ユダヤ信仰を彩る―トローラーの装飾品―(H29.3/2～7/7) 会場：國學院大學博物館		
相互貸借特集展示 XV 中世墓と蔵骨器(H29.5/25～9/28) 会場：西南学院大学博物館		
相互貸借特集展示 XVI 転びキリシタン(H29.7/8～11/10) 会場：國學院大學博物館		
相互貸借特集展示 XVII 東北の遠の朝廷―城郭による辺境支配―(H29.9/29～H30.2/23) 会場：西南学院大学博物館		
相互貸借特集展示 XVIII 和訳聖書の数々―開国から大正改訂まで―(H29.11/13～H30.3/17) 会場：國學院大學博物館		

り」、会期：平成二十九年四月十四日～五月二十一日。主催：当館。  
 ・ 企画展「モノの力・ヒトの力―縄文から現代まで人と工芸の間にやどるチカラ―」(展示図録刊行)、会期：平成二十九年七月二十八日～十月九日。主催：当館。後援：新潮社

青花の会。  
 ・ 企画展「神道の形成と古代祭祀」、会期：平成二十九年十月十四日～十二月十日。主催：当館。\*連携事業にて多言語化を実施。  
 ・ 企画展「いのちの交歓―残酷なロマンティズム―」(展示図録刊行)、会期：平成二十九年十二月十六日～平成三十年二月二十五日。主催：当館。協力：岡本太郎記念館。\*連携事業にて多言語化を実施。  
 ・ 企画展「吉田家・神道と典籍を伝

表2 平成29年度 入館者数

月	(名)
4月	4,575
5月	4,767
6月	7,047
7月	6,168
8月	6,382
9月	3,502
10月	5,405
11月	6,810
12月	4,031
1月	3,660
合計	52,347

平成30年1月末日現在

えた家(國學院大學図書館所蔵吉田家旧蔵資料) 会期：平成三十年三月三日～四月十五日。主催：当館。  
 \*連携事業にて多言語化を実施。  
 ・ 特集展示等は表1を参照。  
 三、教育普及  
 教育普及事業では、展示公開事業と連動したミュージアムトーク、トークセッション、上映会、講演会等に加え、連携事業として外国人向けのワークショップ「日本文化を体験する夕べ―雅楽を聴き、狩衣を着る―」を実施した(詳細は表1を参照)。  
 四、環境整備・営繕  
 環境整備・営繕として、館内空調設備に新たな除湿システムを導入した。また、有害物質低減素材を使用した演示具の整備、温湿度データロガーの追加設置や環境モニターの購入など、設備の充実を図った。  
 今年度の入館者数は、平成三十年一月末日現在、五万二千人を超え、前年度の入館者数と同等となる見込みである。今後も本学の研究・学術資料の公開を中心に、國學院大學のさらなる魅力を国内外に発信できる博物館運営を目指していく。  
 (文責：國學院大學博物館)

# 彙報

## 会議

### ○全体

- ・平成二十九年第二回企画委員会、平成二十九年七月十九日(水) 十一時五分～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十九年第二回人事委員会、平成二十九年九月二十六日(火) 十二時十五分～十二時三十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十九年第二回教員等資格審査委員会、平成二十九年九月二十六日(火) 十二時三十分～十二時五十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十九年第三回企画委員会、平成二十九年十月十一日(水) 十一時～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十九年第二回運営委員会、平成二十九年十月十九日(木) 十二時三十分～十三時三十分、若木タワー八階会議室○七
- ・平成二十九年第四回企画委員会、平成二十九年十一月二十二日(水) 十一時～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十九年第五回企画委員会、平成三十年一月十七日(水) 十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六

- ・平成二十九年第三回人事委員会、平成三十年一月十七日(水) 十二時十分～十二時三十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十九年第三回教員等資格審査委員会、平成三十年一月十七日(水) 十二時三十分～十二時五十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十九年第三回運営委員会、平成三十年一月十八日(木) 十三時三十分～十三時五十分、若木タワー一階会議室○二

- 日本文化研究所
- ・平成二十九年第二回所員会議、平成二十九年七月十九日(水) 十一時～十二時四分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十九年第三回所員会議、平成二十九年九月二十七日(水) 十一時～十一時四十三分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十九年第四回所員会議、平成二十九年十一月十五日(水) 十一時～十一時三十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十九年第五回所員会議、平成三十年一月十一日(木) 十一時～十一時五十六分、A M C棟五階会議室○六

### ○学術資料センター

- ・平成二十九年第二回学術資料センター会議、平成二十九年九月二十七日(水) 十時三十五分～十一時、A M C棟五階プロジェクトルーム二
- ・平成二十九年第三回学術資料センター会議、平成二十九年十二月二

- 十日(水) 十二時～十二時十五分、A M C棟五階プロジェクトルーム二
- 校史・学術資産研究センター
- ・平成二十九年第二回校史・学術資産研究センター会議、平成二十九年九月二十六日(火)(持ち回り稟議)
- ・平成二十九年第三回校史・学術資産研究センター会議、平成二十九年十二月十三日(水) 十一時～十一時十五分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

- 研究開発推進センター
- ・平成二十九年第二回研究開発推進センター会議、平成二十九年九月二十六日(火) 十三時～十三時四十五分、A M C棟五階会議室○六

### ○國學院大學博物館

- ・平成二十九年第二回國學院大學博物館会議、平成二十九年九月二十七日(水) 十一時十五分～十一時四十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二
- ・平成二十九年第三回國學院大學博物館会議、平成二十九年十二月二十日(水) 十二時三十分～十二時四十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

### ○古事記学センター

- ・平成二十九年第二回古事記学研究実施委員会、平成二十九年十月二十六日(木) 十五時十六分～十五時四十八分、若木タワー四階会議室○五
- ・平成二十九年第三回古事記学研

- 究実施委員会、平成三十年一月十八日(木) 十四時～十四時十五分、若木タワー地下一階会議室○二

### 公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

#### ○全体

- ・國學院大學研究開発推進機構十周年記念公開学術講演会「英語圏における神道研究のいま」ヘレン・ハーデカ(ハーバード大学教授)、「縄文の哲学思想」小林達雄(國學院大學名誉教授)、平成二十九年十一月二十五日(土) 十五時～十七時三十分、A M C棟一階常磐松ホール

#### ○日本文化研究所

- ・国際研究フォーラム「日本の宗教はどう教えられているか」、平成二十九年十一月二十六日(日) 十一時～十七時、A M C棟五階会議室○六、報告者＝Micah Aueback(ミシガン大学日本研究センター)、David Wei β(テュービンゲン大学日本学科)、Clinton Godart(北海道大学現代日本学プログラム)、Cynthia Doan(九州大学人文科学研究院哲学部門)、平藤喜久子(國學院大學研究開発推進機構)、櫻井義秀(北海道大学大学院文学研究科)、司会＝星野靖二(國學院大學研究開発推進機構)

- ・シンポジウム「明治期における国学と教派神道・宗教」、平成三十年二月十六日(金) 十三時～十七時、A M C棟五階会議室○六、発題者＝中山郁(國學院大學教育開発推進機構)

教授)、芹口真結子(一橋大学大学院社会学研究科特任講師・日本文化研究所共同研究員)、コメンテーター 林淳(愛知学院大学教授)、幡鎌一弘(天理大学教授)

○学術資料センター

・学術資料センター研究フォーラム 「戦前戦後の沖縄写真」―画像アーカイブの意義と活用―、平成三十年一月二十一日(日) 十三時〜十七時、AMC棟一階常磐松ホール、講演 小川直之(國學院大学教授) 「折口信夫の沖縄民俗探訪と写真」、栗国恭子(沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員) 「鎌倉芳太郎と写真、琉球芸術写真の文化史」、齋藤ミチ子(元國學院大學日本文化研究所助教授) 「久高島・一九七八年度のイザイホー写真」、狩俣恵一(沖縄国際大学教授) 「竹富島・種子取祭の継承と映像について」、映画上映 野村岳也監督「イザイホウ 神の島・久高島の祭祀」(海燕社)

○研究開発推進センター

・神道文化会公開講演会 「和歌と神道文化」(共催)、平成二十九年六月二十四日(土) 十五時〜十七時三十分、百三十周年記念五号館五二〇二教室、演題Ⅰ 「和歌を詠み、言霊(ことだま)を味わう」 田中章義(歌人・作家)、演題Ⅱ 「明治期の和歌と御歌所」 宮本誉士(國學院大學研究開発推進機構准教授)

・明治聖徳記念学会公開シンポジウム 「近代の皇室制度―その運用と課題―」(共催)、平成二十九年七月十

五日(土) 十三時三十分〜十七時三十分、明治神宮参集殿、基調講演 齊藤智朗(國學院大學教授)、川田敬一(金沢工業大学教授)、コメント 武田秀章(國學院大學教授)、藤田大誠(國學院大學教授)、司会 藤本頼生(國學院大學准教授)

・平成二十九年第一回渋谷学研究會、テーマ 「再開発と渋谷川〜まちづくりと都市河川再生の軌跡〜」、平成二十九年八月二十八日(月) 十八時〜二十時三十分、百二十周年記念二号館二一〇二教室、第一部 石井健蔵(NPO法人渋谷川ルネッサンス事務局長) 「渋谷川の変遷とまちづくり」、第二部 富澤房雄(東京都建設局河川部計画課低地対策担当課長) 「都市河川再生とまちづくり」、第三部 中田和宏(渋谷区都市整備部都市基盤整備担当課長) 「渋谷川の再開発が目指すまちづくり」、コーディネーター 司会 田原裕子(國學院大學経済学部教授)

・平成二十九年度共存学公開シンポジウム 「復興・伝統文化・ネットワーク」 東日本大震災から七年目の今(土)、平成二十九年九月九日(土) 十三時三十分〜十七時三十分、AMC棟一階常磐松ホール、基調講演 滝澤克彦(長崎大学准教授) 「リスク社会」における地域社会のレジリエンスと祭祀の意義について、事例報告 東梅英夫(白澤鹿子踊保存会会長) 「震災を超えて新たな未来へ」、荒木奏子(にじのライブラリー前現地責任者) 「人が集まる場所とは〜にじのライブラリーから見た復興と人々の暮らし〜」、久保田裕道(東京

文化財研究所無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長) 「無形文化遺産の災害復興と防災」、コメンテーター 茂木栄(國學院大學教授)、黒崎浩行(國學院大學教授)、司会進行 古沢広祐(國學院大學教授)

・公開研究会 「首都西郊の拡大とインフラ整備」(共催) 渋谷学研究會、首都圏形成史研究会、平成三十年一月六日(土) 十四時〜十七時、AMC棟五階会議室〇六、報告Ⅰ 松本洋幸(大正大学文学部) 「大正期の渋谷町と町営水道の敷設」、報告Ⅱ 岡田直(横浜都市発展記念館) 「首都圏における「西郊」地域の位置づけ〜高度成長期を中心とした国勢調査データによる考察〜」

○古事記学センター

・皇學館大学連携古事記学研究会 「平成二十九年十一月十九日(日) 十三時三十分〜十七時、三号館三三〇七教室、基調発表 遠藤慶太(皇學館大学文学部准教授) 「垂仁紀の祭祀伝承 イニシキイリヒコをめぐる」、コメンテーター 谷口雅博(國學院大學文学部准教授) ・笹生衛(國學院大學神道文化学部教授) 司会 渡邊卓(國學院大學研究開発推進機構助教)

・平成二十九年度国際シンポジウム 「時空を超える(言葉)―神話の翻訳をめぐる―」、平成三十年一月二十日(土) 十三時〜十七時三十分、AMC棟一階常磐松ホール、登壇者 池澤夏樹(作家) 「文体と速度と精神」、パオロ・ヴィラーニ(イタリア・カタニア大学准教授) 「ソーステ

キストの典型としての「古事記」―その翻訳史における諸問題―、アラソン・ロシエ(フランス・国立高等研究実習院教授) 「古事記のフランス語訳」、月本昭男(立教大学名誉教授・上智大学教授) 「ヘブライ語聖書翻訳の経緯から」、コメント シルヴィオ・ヴィータ(京都外国語大学教授)、司会進行 平藤喜久子(國學院大學研究開発推進機構准教授)

出張

○日本文化研究所

・井上順孝、「日本文化研究所の研究事業の成果報告を国際宗教社会学会で行う」ため、平成二十九年七月二日(日)〜七月九日(日)、スイス・ローザンヌ

○学術資料センター

・深澤太郎・尾上周平、「金華山信仰関連石造物群の調査」のため、平成二十九年十月二十四日(火)〜十月二十六日(木)、宮城県石巻市  
・笹生衛・加瀬直弥・吉永博彰・木村大樹、「北陸地方における古代の神道祭祀・儀礼に関する調査研究」のため、平成二十九年十一月三日(金)〜十一月五日(日)、石川県七尾市・羽咋市  
・深澤太郎・尾上周平、「陸奥金華山における石造物補足調査」のため、平成二十九年十二月十九日(火)〜十二月二十一日(木)、宮城県石巻市

○校史・学術資産研究センター  
 ・渡邊卓、「全国大学史資料協議会東日本部会二〇一七年度総会参加」のため、平成二十九年六月八日(木)、千葉県千葉市  
 ・渡邊卓・高野裕基、「全国大学史資料協議会二〇一七年度総会参加」のため、平成二十九年十月十一日(水)、愛知県豊橋市

○研究開発推進センター

・古沢広祐・黒崎浩行・杉内寛幸、「宮城県における東日本大震災被災地復興に関する現地調査」のため、平成二十九年七月二十八日(金)〜七月三十日(日)、宮城県仙台市  
 ・古沢広祐・茂木栄・高橋雄一、「宮城県石巻市における東日本大震災被災地復興に関する現地調査」のため、平成二十九年九月三十日(土)〜十月二日(月)、宮城県石巻市  
 ・古沢広祐・菅浩二、「東ヒマラヤ自然史・自然共生学フォーラム2017、国際有機農業運動連盟世界大会プレ会議」出席のため、平成二十九年十月三十一日(火)〜十一月九日(木)、インド・アッサム州グワハティ・ニューデリー  
 ・宮本誉士・高野裕基、「霧島神宮誌編纂に関する調査・研究」のため、平成二十九年十一月十七日(金)〜十一月十八日(土)、鹿児島県鹿児島市  
 ・古沢広祐・茂木栄・高橋雄一、「宮城県気仙沼市における東日本大震災被災地に関する調査」のため、平成二十九年十二月十六日(土)〜十二月十八日(月)、宮城県気仙沼市

・宮本誉士・高野裕基・上西亘、「霧島神宮に関する資料の調査・研究」のため、平成二十九年十二月二十二日(金)〜十二月二十三日(土)、鹿児島県鹿児島市

○國學院大學博物館

・内川隆志、「企画展『モノの力・ヒトの力』資料借用」のため、平成二十九年七月四日(火)〜七月五日(水)、新潟県長岡市・中魚沼郡津南町  
 ・深澤太郎・尾上周平、「國學院大學博物館と西南学院大学博物館による研究協力協定にともなう展示および打合せ」のため、平成二十九年九月二十八日(木)〜九月三十日(土)、福岡県福岡市

・内川隆志、「第六十五回全国博物館大会参加」のため、平成二十九年十一月二十九日(水)〜十二月一日(金)、大分県大分市  
 ・石井匠、「企画展『いのちの交歓』資料借用」のため、平成二十九年十二月十二日(火)〜十二月十三日(水)、宮城県仙台市・栃木県芳賀郡益子町

○古事記学センター

・渡邊卓、「セインズベリー日本藝術研究所との共同研究会議」のため、平成二十九年七月十五日(土)〜七月二十三日(日)、イギリス・ロンドンほか  
 ・山本健太、「神楽関連調査」のため、平成二十九年七月二十一日(金)〜七月二十六日(水)、高知県の町ほか

・井上順孝・平藤喜久子・渡邊卓・キロス・イグナシオ、「ヨーロッパ日本学会における研究成果の発表と、海外における『古事記』研究の現状調査」のため、平成二十九年八月二十九日(火)〜九月五日(火)、ポルトガル・リスボン  
 ・渡邊卓、「次年度シンポジウム打合せおよび神話伝承地の調査」のため、平成二十九年九月九日(土)〜九月十二日(火)、宮崎県宮崎市・鹿児島県霧島市

・山本健太、「津野山神楽の視察および地元関係者への聞き取り調査」のため、平成二十九年十月二十八日(土)〜十月三十一日(火)、高知県梼原町

刊行物

○全体  
 ・研究開発推進機構『機構ニュース』通号二十一 (平成二十九年六月二十五日発行)

○日本文化研究所

・國學院大學日本文化研究所編『Japanese New Religions in the Age of Mass Media』(平成二十九年六月二十五日発行)  
 ・國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第十号 (平成二十九年九月三十日発行)

機構十周年記念事業刊行物等

・『國學院大學研究開発推進機構十周年記念誌』(平成二十九年十一月二十五日発行)



研究開発推進機構10周年記念品 (クリアファイル・野帳)



國學院大學研究開発推進機構10周年記念誌 國學院大學研究開発推進機構リーフレット

## 資料紹介

## 山梨県笛吹市 花鳥山遺跡出土 深鉢



甲府盆地に面した御坂山塊の北麓に所在する花鳥山遺跡は、縄文時代前期後半の諸磯式を主体とする大規模な集落遺跡である。明治期より考古遺物が散布していることが知られており、昭和二十九（一九五四）年・昭和三十（一九五五）年に本学の樋口清之らが発掘調査を行った。

その結果、三棟の円形を呈する竪穴建物跡や、早期・前期・中期・晚期に属する土器・石器などが出土している。当時、未だ前期に遡る資料が少なかった山梨県においては、注目すべき成果が得られた調査であり、昭和五十（一九七五）年刊行の『八代町史』に概要が報告された。國學院大學博物館では、出土遺物に加えて、関連する図書類も保管しており、町史刊行後も正式な報告書を刊行する計画が進んでいたらしい。部分的に完成している図版も残されているが、なお未完のままとなっているのが惜まれる。

本資料は、欠損部分が少なくないものの、本学所蔵資料の中でも、特に知られた作品の一つである。直線的に開く四単位の波状口縁と、半截竹管状の工具で結節を加えた浮線文による渦巻文が特徴であり、諸磯c式でも新しい段階に属する。なお、当遺跡出土の諸磯式から十三善提式にかけての土器は、樋口氏によって花鳥山式と称されたこともある。

（文責・深澤太郎）